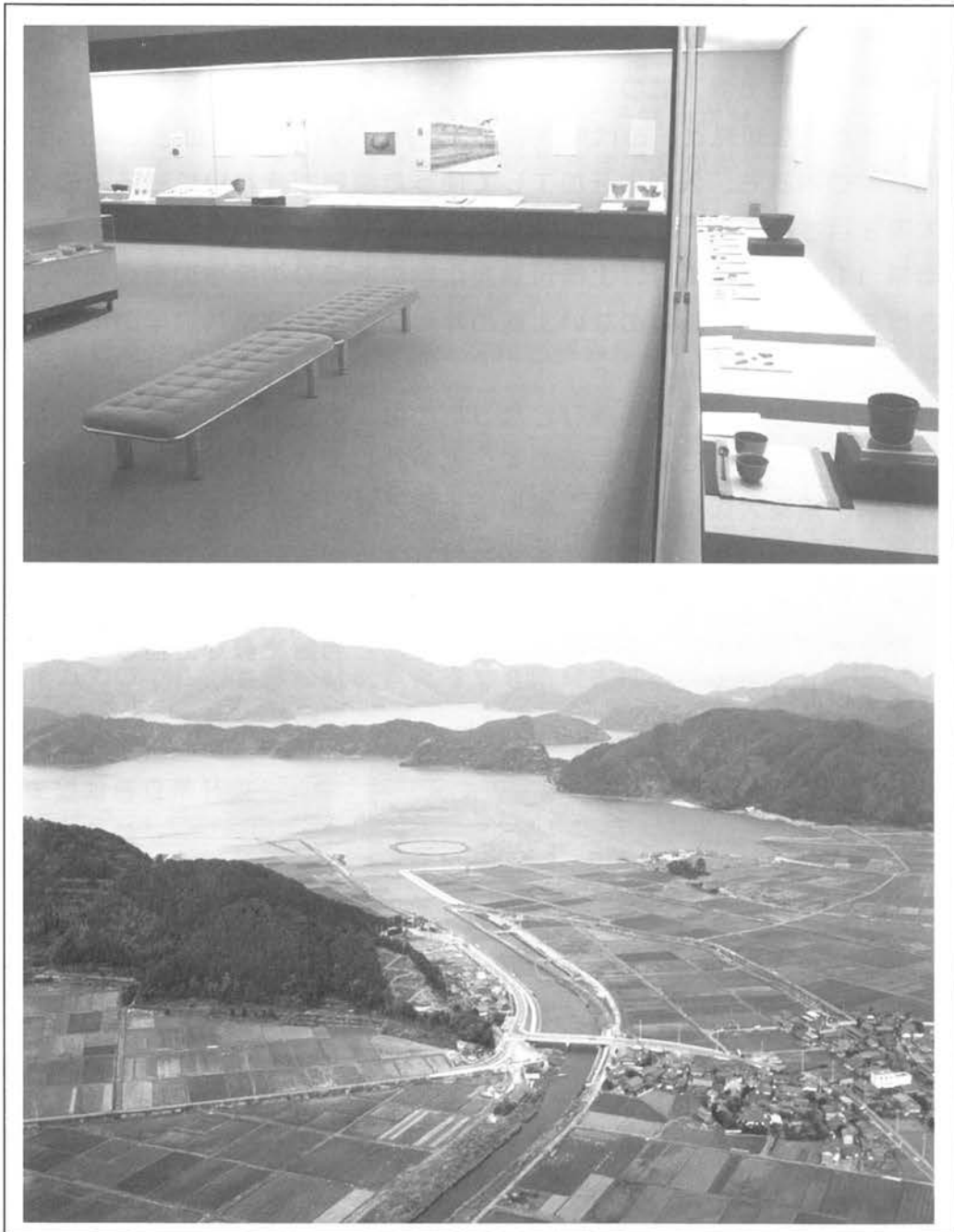


福井県立若狭歴史民俗資料館テーマ展

再発見！鳥浜貝塚資料



会期 平成20（2008）年2月16日（土）～3月3日（日）

ごあいさつ

このたび開催するテーマ展「再発見！鳥浜貝塚資料」は、当館が保管する膨大な鳥浜貝塚資料のうち、最近新たに分かった知見を、いち早く皆様に紹介する目的で企画した展覧会です。

展示内容は、まず、新たな知見を含む「再発見！」コーナーとして、縄文時代草創期の土器や木器、早期の土器、そして土器付着炭化物による最新の年代測定結果などを紹介します。次に、初公開資料を含めた「秀品」コーナーとして、常設展示に出されていない前期の多彩な木器や球根付着土器など、興味深い資料の数々を、この機会に展示します。

中でも注目は、1万2千年前に生活の劇的な変化があったのか、突如現れた驚くほど精巧で芸術的な「多縄文土器」についてであり、全国の事例と鳥浜資料の詳細な観察のもとに、見えてきた新たな知見と、時代背景などを、たっぷりの解説付きで紹介する点です。

また、同時期の木器も、人が木を加工して使った痕跡がきれいに残る、国内で最も古い事例で、大変注目されます。

さらに炭素14年代測定では、土器付着炭化物のあまりの保存の良さから、極めて良好な成果をあげました。より誤差のない土器の年代値は、縄文時代前半の土器の前後関係を知る重要なデータとなります。

最後に今回の展示が開催できる運びとなったのは、各分野の研究を活発に行っている3人の若き研究者たちの功績によるものです。ご紹介しますと、草創期の土器は村上昇（立命館大学大学院、現東大阪市）さん、早期の土器と年代測定は遠部慎（国立歴史民俗博物館）さん、同じく早期の土器は熊谷博志（奈良大学大学院）さんです。鳥浜資料の詳細な観察から実測・分析を何度も当館を訪れては行なって下さいました。また展示準備に関しましては、村上さんを中心に、遠部さん、熊谷さんと当館職員が分担して行ないました。心から感謝を申し上げます。

平成20年2月
福井県立若狭歴史民俗資料館
館長 阿部 登記造

例言

- ①本パンフレットは、福井県立若狭歴史民俗資料館テーマ展示「再発見！鳥浜貝塚資料」（平成20年2月16日～3月3日開催）の解説パンフレットです。
- ②展示内容の構成とパンフレットの編集は、本館学芸員の櫛部正典と東大阪市教育委員会の村上昇を中心に、遠部慎（国立歴史民俗博物館）と熊谷博志（奈良大学大学院）が協議して行いました。文責は各文末の（ ）内に示しました。
- ③長岡市立科学博物館と青森県埋蔵文化財調査センターより写真提供を受けました。また年代測定にあたっては、平成16～20年度科学研究費補助金（学術創成研究：課題番号16GS0118）の支援を得ました。記して感謝いたします。
- ③本パンフレットは、平成19年度科学研究費補助金（若手研究）スタートアップ：課題番号19800058『先史時代における貝塚出現期の年代学的研究』の成果でもあり、印刷費用にその一部を充てました。

鳥浜貝塚と発掘の経緯

鳥浜貝塚は、若狭町(旧・三方町)鳥浜字高瀬にある三方湖に注ぐ鱒(はず)川と高瀬側の合流点付近に広がり、縄文時代の始まりから終わりまでの約1万年間にわたる人々の暮らしの跡が見られます。

鳥浜貝塚では、当時の人々が使った道具や食べかすなどのゴミが川底に堆積していましたが、実際の生活の場は丘陵の上でわずかに発見されただけです。この丘陵こそ、縄文時代の鳥浜ムラが存在した場所だと考えられますが、鱒川新設工事(1925～29年)の際に大きく削られてしまいました。

鳥浜貝塚は、1961年7月に、若狭地方の考古学に精力的な活躍をされた石部正志さんが鱒川の川底から遺物を採取して発見されました。その直後、高瀬川の護岸工事で川底が掘り上げられたことを受けて、同志社大学と立教大学による第1次発掘調査が行われました。この頃から、多量の貝・骨・木材・種子・昆虫の羽根までもが良く残る、全国でもまれな貝塚を伴う低湿地遺跡であることが知られるようになります。しかし、たびたび氾濫する鱒川と高瀬川には、ただちに改修が必要でした。そして、1972年から、福井県教育委員会によって改修工事に先立つ発掘調査が行われ(第3次調査)、以後、1975・1980～1985年度と大規模な発掘調査が続きました(第4～10次発掘調査)。現在、本資料館が所蔵する鳥浜貝塚の資料は、この時の出土資料です。発掘は過酷であったようですが、自然科学の各分野の研究者の協力を得ながら、学際的な発掘調査が勢力的に進められました。

その甲斐あって、木製品や動植物遺存体などが大量に見つかり、それまでの縄文時代に対するイメージを次々と覆していきました。特に、縄文時代前期の丸木舟の発見は、大変なニュースになりました。また、湿地に堆積した遺物と土の層が何層も詳しく検出できたおかげで、道具とその組み合わせの変化が詳しく分かるようになりました。鳥浜貝塚は「縄文時代のタイムカプセル」と言われ、教科書でも紹介される代表的な遺跡になりました。

21世紀を迎えた今、鳥浜で生活した祖先の記憶から何を学びとるべきか、また自分たちの

記憶と共に何を後世に伝えてなければならないのか。この展示が、私たちの歴史をふりかえるきっかけになれば幸いです。

(村上・櫛部)



I. 若狭の源流 草創期

鳥浜のはじまり

考古学では、縄文時代を六つの時期に分けます。鳥浜に人々が暮らし始めたのは、今から1万年以上も前の縄文時代の始め（縄文時代草創期）のことです。ここでは、鳥浜に人々が住み始めたころに焦点を当てます。
(村上)

ライフスタイルの変化と土器

縄文時代の初め、日本では土器が使われ始めます。土器は重たく持ち運びに向かないのが欠点ですが、「煮る」という調理法が広まり食材の幅が広がりました。最初に日本列島に広まった土器は鳥浜貝塚でも出土している「隆起線文土器」と言われる土器です。このころから、人々の生活に変化が表れます。

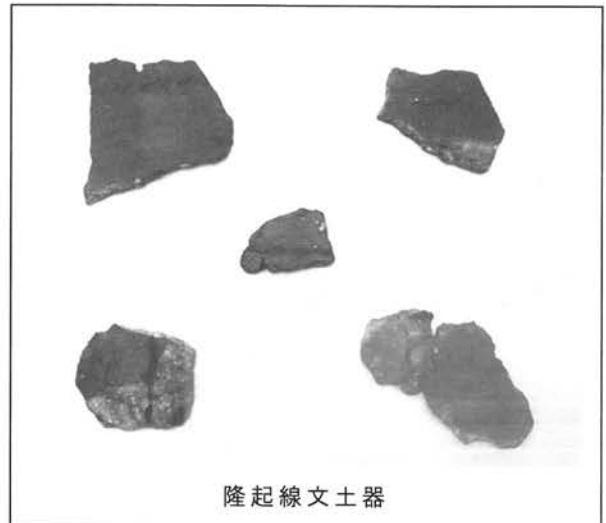
旧石器時代に比べて、縄文時代になると同じ場所にやや長い日数留まるようになり、やがてムラができたと考えられます。徐々にではありますが、竪穴式住居や貯蔵穴など、普段使いで長期間使用する施設が造られるようになります。「自分たちのムラ」ができてくると、墓地(墓域)が生まれます。当時のムラの多くは、2～3世帯程度が暮らすとても小さなものであったと考えられています。ムラの出現は同じ場所(家)に住み続ける現代生活の原型であり、土器の普及はライフスタイルの変化を象徴するできごとと言えます。
(村上)

遺物の増加

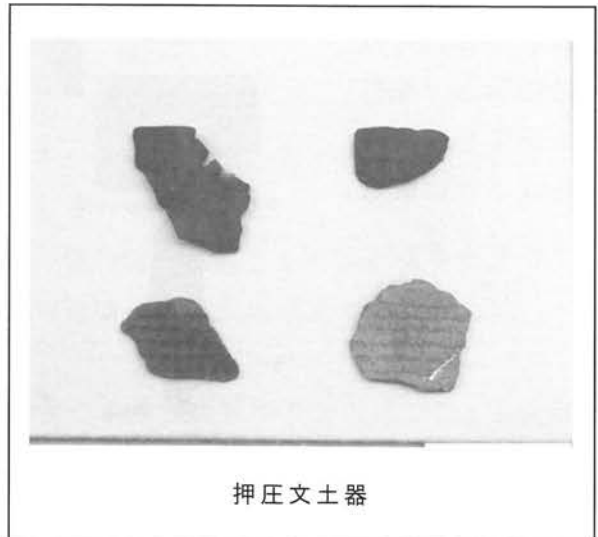
縄文時代草創期の後半には「多縄文土器」が使われ始めます。鳥浜周辺で本格的にヒトが生活を始めたのはこのころからで、遺物の出土量がやや増加します。当時は、一度暖かくなった気候が、再び寒くなる時期とされています。



斜格子沈線文土器



隆起線文土器



押圧文土器

多縄文土器の包含層からは、板材、杭、弓、棒、「糸」が出土しました。動植物遺存体では、魚の骨、焼けた骨、シカの骨、大型の種子(ヒシ、クリ、エゴノキ、クルミ、ブナ、ミズキ、ヤマブドウ、カヤ、トチ、クリ)が見つっています。寒い地域で育つブナの種子の出土から、草創期後半の鳥浜は前期よりも寒冷な気候であったことが分かります。

鳥浜貝塚の多縄文土器には、背があまり高くなく底が平らなものがあります。真上から見ると、四隅が丸い四角い形をしているものもあります。このような多縄文土器は「室谷下層式」などと言います。新潟県室谷洞穴から出土した土器が基準で、東日本を中心に広がります。鳥浜貝塚は一番西側に位置します。

室谷下層式以外のものもあります。例えば、縄を丸めたものや棒状の工具を土器の表面に押し付けた痕を残すものや、土器の口の外側に縄や棒を押し付けた小さな点が巡るものがあります。前者は、新潟県小瀬が沢洞穴に似た手法で模様をつけた土器があります。鳥浜貝塚では「押圧文土器」と呼ばれています。室谷下層式よりも古いものと考えられます。後者は室谷下層式よりも新しいと考えられ、静岡県三の原遺跡に類例が見られます。

鳥浜貝塚の多縄文土器は、【小瀬が沢洞穴に見られるもの⇒室谷下式(古・新)⇒静岡県三の原遺跡に見られるもの】と、いくつかの時期に分けることができそうです。

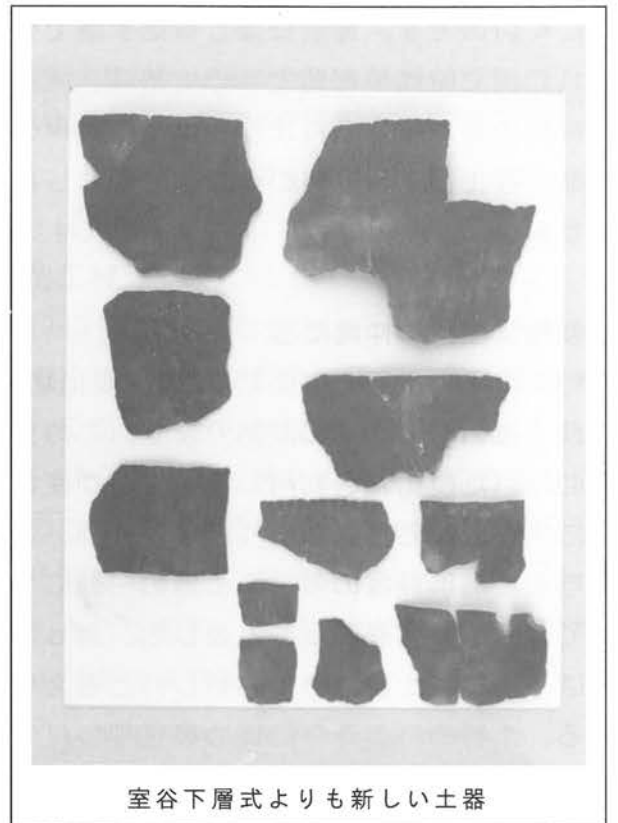
(村上)

多縄文土器の作り方

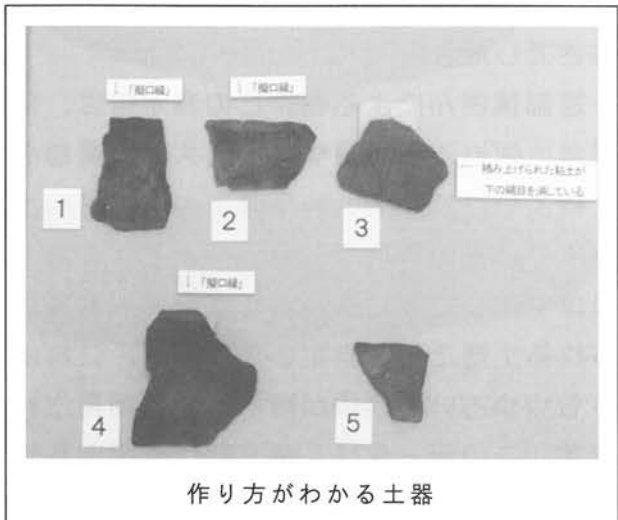
鳥浜貝塚の多縄文土器は、土器の表面に残る縄目が浅いのが特徴です。鳥浜貝塚の多縄文土器は底の部分から順番に作られ、少しずつ形を整えながら粘土が積み上げられます。一旦、丁寧に表面に縄を転がした



室谷下層式土器



室谷下層式よりも新しい土器



作り方がわかる土器

作りかけの土器に、さらに粘土を積み上げるのですが、積み上げられる部分は乾燥が進み少し硬くなっています。これを被うように上から粘土を積み上げて行き、整形後に再び土器の表面に縄を転がします。そのため、縄が深くまで食い込まず、縄を転がした後に軽く土器の表面をなでているため、縄目が一層浅いのです。

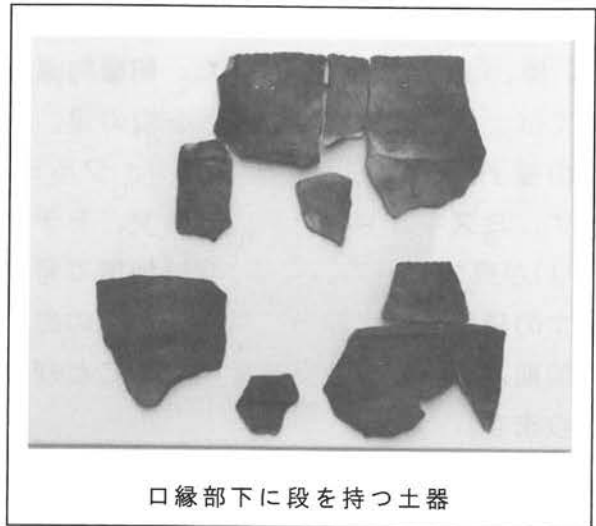
鳥浜貝塚の多縄文土器に特徴が似ている室谷下層式は、「箱作り」と呼ばれる手法で作られていると考えられています。しかし、鳥浜貝塚の土器片の側面には粘土が剥がれた痕がなく、「箱作り」のような作り方は考えにくいのです。鳥浜貝塚と似た手順で作られた縄文時代草創期後半の土器は、本州の東部の各地で見られます。草創期後半の特徴的な土器の作り方の一つなのかもしれません。

(村上)

多縄文土器の仲間たち

鳥浜貝塚の土器の表面には、煤(炭化物)が厚く付いているものがあります。この土器に付いた炭化物を利用して、土器が使われた年代を測る方法があります。今回、この方法で鳥浜貝塚の多縄文土器の一部について、その年代を測ってみました。測ったのは、多縄文土器の中でも新しいと考えられる、土器の口の外側に縄や棒を押し付けた痕が規則正しく一周するものです。結果は、およそ1万2千年前(較正年代)という古さでした。

遠部慎さんによると、この測定値は、愛媛県上黒岩洞穴Ⅵ層や福岡県大原D遺跡の土器よりは新しく、岐阜県花の湖遺跡の土器よりは古い年代だということです。鳥浜貝塚で見つかった室谷下層式の仲間と考えられる土器たちを測定したならば、これよりもやや古い年代値が得られると期待されます。このデータは、縄文時代草創期後半の日本列島に広がる土器の古さを比較する



口縁部下に段を持つ土器

上で非常に重要です。

(村上)

草創期の木製品

国内最古とされる鳥浜貝塚出土の草創期の木製品は200点以上もありますが、これまでほとんど紹介されることがありませんでした。尖り棒(1点)や石斧柄未成品(2点)を除くと、地中に埋められた杭以外、いったい何に使われたのか不明なものが多いからです。

昨年(2007年)、草創期の木製品資料のうち、1983~85年に出土したものの詳細な観察と実測を行ないました。その結果、板材や用途不明の加工材においても、興味深い点や今後の課題に溢れ、縄文時代の幕開けの具体的な解明に役立つ一級資料であることが改めてわかりました。

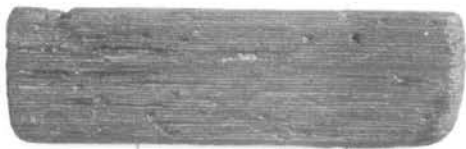
草創期木製品の多くに焦げた痕跡が見られます。前期の加工法に、焦がして削るかすり減らして形を成形させる方法がありますが、草創期でもこの方法がとられたのかわかりません。木を加工する場合、乾燥した木はとても固くて削ることは大変難しいのですが、焦がすと比較的楽に削ることができます。また焦がす以外にも、生木の状態で削ったり、水に漬けて柔らかくしたりします。

(櫛部)

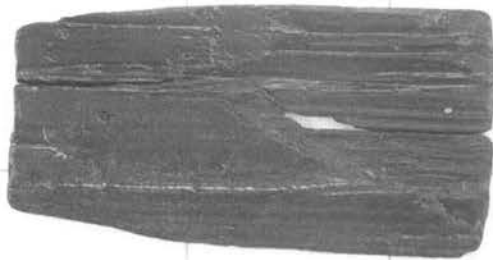
板（84T 出土）

1984 年の調査では草創期の各層から、板がまとまって出土し、隆起線文土器層〔S1 期〕や、その下層〔S0 期〕から出土した古い時期のものがあります。

特徴として手のひらサイズの非常に小型なものが多く、これらは別の何かを加工する時に偶然生じた残りかすかもしれませんが、板の端部が直角に整った丁寧な作りをしており、何らかの用途に加工された可能性も考えられます。中でも多縄文土器〔S3 期〕に伴う形の整った柁目板は、他の板目板よりも丈夫で、その下端部を見るとやや丸みを帯びてすり減った感じがあり、何らかの用途に使われたことも考えられます。また人為的な穿孔か、虫食い穴なのかは不明だが、板の上部中央に小さな“孔”が開くものが 3 点みられます。（櫛部）



多縄文土器に伴う整った柁目板
長さ 11.0、幅 3.3、厚さ 0.6 cm スギ材



隆起線文土器に伴う穴の開いた板
長さ 12.0、幅 6.3、厚さ 0.4 cm スギ材

杭（83T 出土）

1983 年の調査では草創期の多縄文土器〔S3 期〕に伴う杭が、17 本検出されています。そのうち完全な形で加工痕が鮮明に残る 2 点について紹介します。

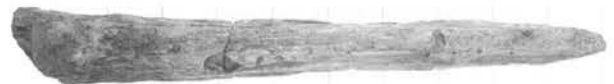
1 はヒノキの太い丸木材で、下端を一方から尖らせています。石斧による 16~20

回の打撃痕が確認され、その刃の形状も明瞭に残っています。石斧の刃は木の軸に対して約 45 度で斜めに食い込み、いったん刃の跡を付けて水平に剥がされます。その刃幅は最大で 3.5 cm ほどです。またその剥離面は、やや丸い特徴があります。

2 は丸木の下端部だけを尖らせた杭と違い表面全体が剥がされ、下に向かって徐々に細くなります。断面は正形状をしています。（櫛部）



1. 長さ 56.1、径 7.9 cm ヒノキ材



2. 長さ 51.6、一辺 5.5 cm トリネコ材

加工材

1985 年の調査で出土したもののうち、何に使われたか分からない両端に加工が認められる用途不明の木製品があります。

1 は丸木材で両端を尖らせる加工をしたものです。2 は芯を十分に残して縦に分割した割材で、特に右側は中心付近から細く加工されており、手に持つための加工の可能性が考えられます。（櫛部）



1. 長さ 19.6、径 6.7 cm イヌエンジュ材



2. 長さ 33.2、幅 8.4、厚さ 7.3 cm
イヌエンジュ材

II. 激動の早期

鳥浜貝塚の早期押型文土器

鳥浜貝塚の縄文時代早期を代表する土器として、押型文土器が挙げられます。押型文土器は文様を刻んだ棒を土器の上で回転させて施文を行う土器で、今から約 11500～約 9000 年前（較正年代）の長期間にわたって用いられました。

鳥浜貝塚の押型文土器は、土器型式で言うと、「神宮寺式」から「細久保式」にかけての資料が主体です。1980 年度調査の L 地点（80L 地点）と 81 年度調査の L 地点（81L 地点）では、^{うつりょう}鬱陵火山灰の上下からこれらが出土しています。近畿地方における数少ない押型文土器の層的事例であり、重要な成果であると言えます。（遠部・熊谷）

III. 安定した前期

鳥浜貝塚と炭素 14 年代測定

鳥浜貝塚では、これまでに多くの年代測定が行われてきました。その結果は、花粉分析などをはじめとする関連諸科学の研究成果とともに、縄文時代の研究史上、重要な測定例であるといえます。たとえば、1983 年の『縄文文化の研究 8』（雄山閣）の「縄文時代の年代」の中では、当時東海・中部地方で行われていた年代測定結果を凌駕する数の測定がこの 1 遺跡で行われたことが確認できます。

近年、土器に付着した燃料起源の“煤”や内面に付着した“焦げ”などの炭化物の年代を測定することが可能になりました。これまでの年代測定例の多くは土器に伴出する炭化材などを測定するため、絶えず同時性の問題を抱えていました。しかし、土器に付着した炭化物の年代を測定する場合は、同時性の問題を排除することができます。これは数 mg 程度の精製された炭素の年代測定が可能な AMS (Accelerator Mass Spectrometry) 炭素 14 年代測定法の進歩に



よるものです。その結果、土器が実際に使用された年代が明らかになり、土器型式を年代の物差しに用いる考古学にとって大きな転機になりました。

現在、あらためて鳥浜貝塚出土土器の年代測定を進めています。その結果、

多縄文土器	10100BP (約 12000-11800 年前)
押型文土器	9300-8800BP (約 10600-9600 年前)
羽島下層 II 式	5700-5500BP (約 6500-6300 年前)
北白川下層 II b 式	5300-5200BP (約 6200-6000 年前)
北白川下層 II c 式	5200-5100BP (約 6000 年前)

という測定値が得られています。これは周辺の遺跡のデータと比較しても大きな齟齬は見られません。

鳥浜貝塚にはこの他の時期の資料も数多くあり、近畿地方のみならず日本列島の土器編年の基準となる遺跡です。そのため、今後も測定を進めていくことにより、縄文時代の年代を明らかにしていくことができると考えられます。（遠部）

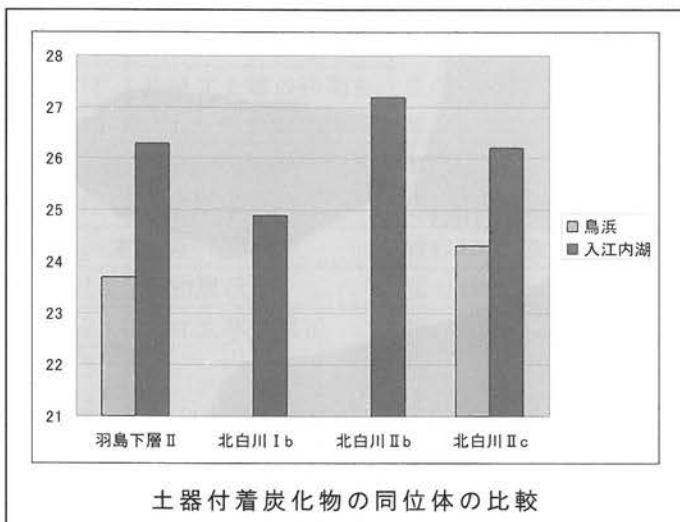
同位体分析

同位体とは、原子番号（陽子数）が同じで、質量数（陽子と中性子の数の和）が異なる物質のことです。同位体には、放射能を発して中性子を放つ不安定な放射性同位体と、常に安定な安定同位体とがあります。例えば、炭素では ^{12}C と ^{13}C が安定同位体であり、 ^{14}C が放射性同位体です。 ^{12}C に

対する ^{13}C の割合を、炭素安定同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ といいます。今回は、年代測定とあわせて、安定同位体の測定を行いました。

その結果、土器内面に付着した安定同位体は、鳥浜貝塚では $-23\sim-24\%$ にまとまりました。それに対し、琵琶湖沿岸の米原市入江内湖遺跡では $-25\sim-26\%$ にまとまります。このことは、同じ近畿地方周辺の遺跡でも、地域によって土器で煮炊きしていたものが異なる可能性が高いことを示しています。鳥浜貝塚のデータは $\delta^{13}\text{C}$ の低いことから、海産物を土器で煮炊きしていたことを示していると考えられます。

(遠部)

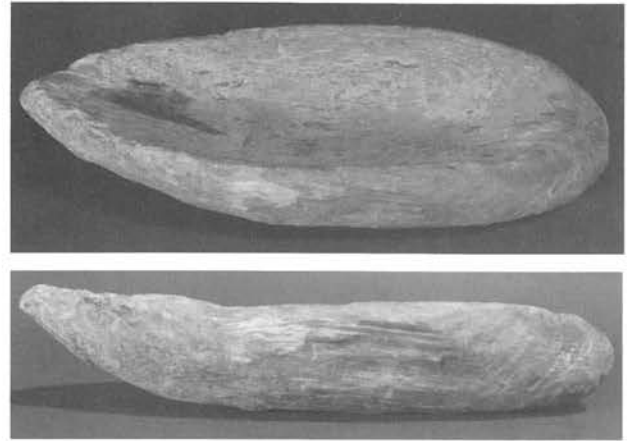


前期の木製品

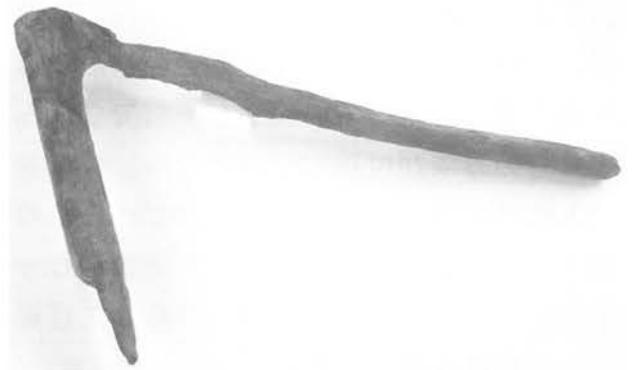
前期の鳥浜貝塚では、数多くの木製品が使われていました。石斧の柄、弓、木製の容器、丸木舟といった数多くの木製品は、「木の文化」である縄文文化の性格の一端をよく表しています。特に、石斧の柄は多様で数も多く、これほど多量に出土した例は他にありません。また、道具と用途ごとに木の種類を選択していることも分かっています。鳥浜貝塚の木製品は、縄文時代の木材加工と利用の実態を理解する上で、欠くことのできない資料です。

今回の展示では、縄文時代前期の木製品

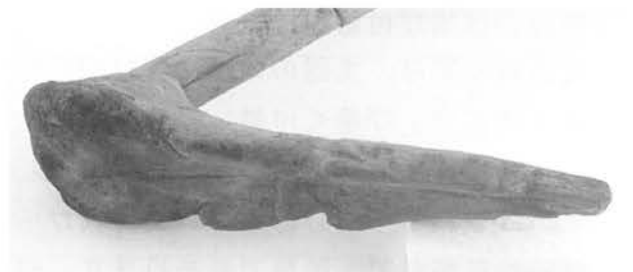
の中でも特に優れたものや珍しいもの、普段は公開していないものを中心に並べました。長年土に埋もれていたため損傷しているものが大半ですが、技術の高さをうかがい知ることはできます。(櫛部)



舟形容器 (初公開資料)



加工に使われた石斧柄 完形品 (横斧)



骨角器の刺突具を装着した柄の台部



桜の皮を巻いた弓 (飾り弓)

漆製品

鳥浜貝塚では、漆塗り土器、木製品、糸、漆塗りパレット(工具)など、約 200 点の漆製品が出土しています。木製品では鉢・桶・浅鉢・筒型三足などの容器類が多く、弓・櫛・特殊な漆製品が1ないし数点出土しています。

漆塗り木製品は前期の初めからありますが、土器は前期後半になって出現します。またその頃から赤黒の渦巻き文様を施した儀式用の華やかな製品が出現してくることが特徴です。
(櫛部)

初公開、漆塗りパレット

小型鉢の底部片を再利用したもので、内面に漆を溜め、片手の指でつまみ持って使ったと思われます。黒色と赤色の漆液が内外面に厚く付着していますが、指でつまんだ部分のみ漆が付着していません。また掬い入れたのか先端部断面にも漆がべったり付着しています。漆塗り工具であるパレットの出土は、鳥浜で漆製品が作られた証拠となる貴重な資料です。
(櫛部)

野蒜^{のびる}の球根が付着した土器

鳥浜資料では、土器の内面に食材が炭化した「おこげ」が厚く付着しています。その形から食材が分かるものが「野蒜の球根」です。ユリ科ネギ属野蒜は、縄文時代から食べられた野草で、薬草でもあります。日当たりの良い河原の土手などで多く群生しています。縄文時代の人はこの野蒜をどのように調理して食べていたのか、今のところ明らかではありません。鳥浜資料の土器の内面炭化物を詳細に観察すると、野蒜の球根付着土器の見落としが少なからずあることが分かりました。
(櫛部)



赤黒色漆絵土器

(赤色の上に黒色で渦巻き文様などを描く)

当資料は重要文化財保存修理事業の対象資料として、資料の劣化を防ぎ恒久的な保存・活用を行なう目的で、平成 21 年度に保存処理されます。そのため、今回の展示をもって水漬け状態での展示は終了となります。



漆塗りパレット (初公開資料)



平底の内面に炭化した野蒜の球根が付着している状況

「再発見！鳥浜貝塚」出品リスト

番号	展示コーナー	資料名	点数	特記事項
若狭の源流 草創期				
1. 土 器		資料 56 点（うち重文 46 点） 写真パネル 2 点 図 1 点 合計 59 点		
1-1	鳥浜のはじまり	斜格子沈線文土器	1	重要文化財
1-2	ライフスタイルの変化	隆起線文土器	5	重要文化財
1-3	遺物の増加	ブナの実	1	
1-4		押圧文土器	4	重要文化財
1-5		多縄文土器（室谷下層式土器）	2	重要文化財
1-6		同 ②—1	3	重要文化財
1-7		同 ②—2	6	うち重要文化財 3 点
1-8		同 新しい段階 ③	1	重要文化財
1-9		同 底部 ④	2	重要文化財
1-10		同 全体復元した土器	1	重要文化財
1-11		室谷下層式よりも新しい土器 ①	4	うち重要文化財 1 点
1-12		同 ②	11	重要文化財
1-13		多縄文土器の作り方	①	5
1-14	②		8	重要文化財
1-15	多縄文土器の仲間たち	炭化物付着土器と年代測定資料	2	うち重要文化財 1 点
1-16		写真 櫛引遺跡出土多縄文土器	1	青森県埋蔵文化財調査センター提供
		写真 室谷洞穴出土多縄文土器	1	長岡市立科学博物館提供
1-17		図 同時期の遺跡分布図	1	
2. 木 製 品		資料 20 点（実物 6、写真 14）（うち重文 3 点） 写真パネル 2 点 合計 22 点		
2-1	実物展示	尖り棒	1	重要文化財
2-2	原寸大写真展示	板	7	
2-3		杭	2	
2-4		加工材	3	
2-5		焦げる 焦がす？	2	
2-6	木の伐採加工用石器	局部磨製石斧	1	重要文化財
		小型磨製石斧	1	重要文化財
2-7	壁面	写真 81L 地区土層堆積状況	1	
		写真 ヒョウタン出土状況	1	
2-8	独立ケース水漬け実物展示	最古の縄（糸）	1	
		整った板	1	
		両端を尖らせた加工材	1	
激動の 早期		資料 31 点 工作資料 7 点 合計 38 点		
3-1	年代測定資料	押型文土器	3	
3-2	押型文土器のかたち	全体復元した押型文土器	1	
		波状口縁の押型文土器	1	
		押型文土器 尖底	2	
3-3	押型文土器の文様	押型文土器	3	
		文様のつけ方（原体・粘土板）	7	熊谷博志作
3-4	80・81L 火山灰層上 下の押型文土器	火山灰層上の押型文土器	10	
		火山灰層下の押型文土器	11	
安定した前期				
4. 土 器		資料 8 点 図 2 点 合計 10 点		
4-1	年代測定資料	羽島下層Ⅱ式	2	
		北白川下層Ⅱb式	3	

		北白川下層Ⅱc式	3	
		図 年代測定資料と測定値	1	
4-2	同位体分析	図 同位体の比較	1	
5. 木製品等 秀品コーナー 資料 23 点 (うち重文 12 点) 写真 6 点 合計 29 点				
5-1	特殊な石斧柄	縦斧の石斧柄完形品	1	重要文化財
		縦斧の石斧柄台部	1	重要文化財
		装着した石器 小型磨製石斧	1	重要文化財
		横斧の石斧柄台部	1	重要文化財
		装着した石器 磨製石斧	1	重要文化財
		ポイントを装着した石斧柄	1	重要文化財
		骨製刺突具	1	
		写真 石斧柄の出土状況	1	
5-2	飾り弓	樹皮巻き弓	2	うち重要文化財 1 点
		樹皮巻き赤漆塗り弓	1	重要文化財
		赤色漆塗り弓	1	重要文化財
		写真 ベンガラ塗土器出土	1	
5-3	舟形容器	初公開！舟形容器	1	重要文化財
		写真 棧橋とみられる杭群	1	
		写真 1号丸木舟と調査員たち	1	
5-4	漆製品	漆塗り土器	4	
		漆絵土器	1	重要文化財
		初公開！漆塗りパレット	1	
		写真 漆塗りパレット	1	
		写真 鳥浜貝塚の多彩な漆製品	1	
5-5	野蒜の球根が付着した土器	野蒜の球根付着土器	4	
		杓子	1	重要文化財
その他		写真パネル 3 点 図 1 点	合計 4 点	
6	壁面展示	図 鳥浜貝塚全体図	1	
		写真 鳥浜貝塚の遠景	1	
		写真 鳥浜貝塚の調査風景	1	
		写真 木製品の出土状況	1	

展示資料数 合計 164 点

実物資料 124 点 (うち重要文化財 61 点)

実物大写真資料 14 点、工作資料 7 点、写真パネル 13 点、図 4 点
合計 162 点

福井県立若狭歴史民俗資料館テーマ展
「再発見！鳥浜貝塚資料」解説パンフレット

発行 平成 20 (2008) 年 2 月 16 日

発行元 福井県立若狭歴史民俗資料館
福井県小浜市遠敷 2-104

編集 遠部慎・熊谷博志・村上昇・櫛部正典

印刷